



# きじむんの どう〜ちゅばにい〜 十二支編

## サル 第4回 申 琉球のサルのおはなし

キーワード：サル 組踊「花売の縁」 首里城 伊波普猷

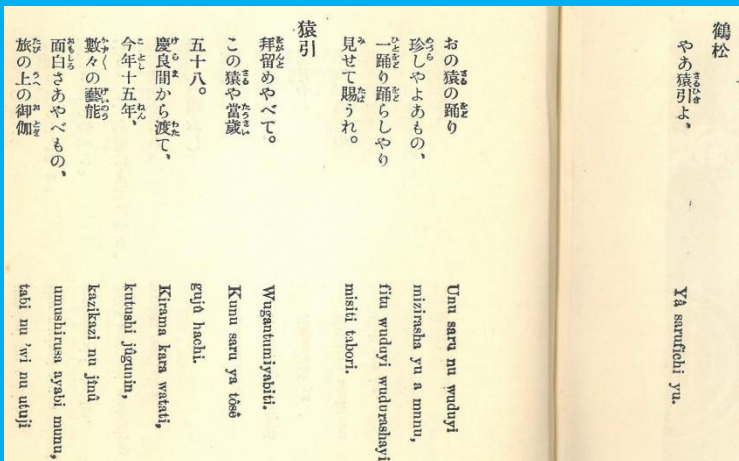


ハイサイ！ キジムンヤイベーン！（こんにちは！きじむんだよ）  
ウチナーグチでシチグワチ(7月)というのは、7月、もしくは旧盆という意味だよ。  
旧盆は、ご先祖があの世界から帰ってくるヨ。楽しい行事だね！

今回は、十二支の申(さる)のお話。沖縄には、サルは生息していないけれど、サルの話はいくつもあるよ。不思議だね。

琉球の伝説によれば、むかしむかし、沖縄の慶良間のシカが、サルのいたずらに怒って、サルをだまして自分の背中に乗せて沖合まで泳いで行って、海中にサルを捨てたんだって。シカは泳げるけれど、サルは泳げないから溺れて死んでしまったそうだよ。それから琉球にサルはいなくなったんだって。面白い伝説だよ。

サルは、沖縄にいないけれど、琉球で18世紀に誕生した古典演劇「組踊」には、サルが出てくるよ。



サルが出る組踊の演目は、「花売りの縁(はなうりのえん)」。母親と男の子が、行方不明のお父さんを捜して旅をしている途中で、猿引きに出会います。

幼稚園生くらいの役者が、サルのお面と着ぐるみを着て出てきます。小さく可愛い子ザルです。サルの飼い主が言います。「このサルや、当歳五十八。慶良間から渡りて、今年十五年、数々の芸能面白さあやべもの」(このサルは今年58歳、慶良間島から出てきて、今年で15年目、いろいろな芸能ができて面白いですよ!) このセリフで観客はどっと笑います。だってどうみても小さな子供ですからね!

サルは、音楽に乗せて可愛らしく踊ります。愛らしい場面で拍手喝采です。

伊波普猷『琉球戯曲集』より「花売の縁」591ページ

この組踊の台本は、沖縄学の父といわれた伊波普猷の本『琉球戯曲集』(1929年、春陽堂)で紹介されています。その本では、台本のセリフの下にローマ字で発音も書かれていて、当時は画期的な本でした。当館では、伊波普猷の蔵書を伊波普猷文庫として所有していて、とても素晴らしい資料がたくさん入っています。

首里城では、サルの骨が発掘で出てきました。首里城の人たちがサルを食べたのか、それともペットとしてかわいがって飼われていたのか、と、学者たちの間で議論されたことがあります。

琉球にはいないはずのサルのお話、面白いですね。

沖縄学の父、伊波普猷については左のQRコードから、琉球沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブへGO！ (AS)



デジタルアーカイブQRコード

琉球大学附属図書館 保存公開係 平成30年7月1日発行

